

ヒト臓器マウスで差別化

福永社長 「黒字体質になる」

医薬品開発支援サービスを手掛けるトランスジェニックスは、2015年3月期決算で、上場初の最終黒字化を達成し、今後は安定成長を目指す。遺伝子改変動物作製から非臨床試験までの一括受託に向け、免疫不全動物を用いないヒト臓器マウスを開発し、他のCROとの差別化モデルにする。福永健司社長は、本紙のインタビューに応じ、「研究開発よりも事業基盤に投資してきた。売上50億円までは現状の事業構造で成長できる」と述べ、まずは売上を拡大し、黒字体質企業の実現を優先させる方針だ。

トランスジェニックス

同社は、基礎研究分野に
おけるトランスジェニックス
マウスなど、遺伝子改変マ
ウス作製での実績で認知度
を高め、14年には非臨床試

験CROである旧新薬開発
研究所(現・新薬リサーチ
センター)や、遺伝子解析
センター)に強いジェネティクスラボ
を相次いで買収し、CRO
新薬リサーチセンターの連

事業に参入した。15年3月
期は売上が前期比約21%増
の約19億円、営業利益が
2300万円、純利益が
1700万円と黒字転換を
果たした。
今年度はトランスジェ
ニックスのマウス事業部と
新薬リサーチセンターの連

携を通じて、医薬品の基礎
研究から非臨床まで、ワン
ストップ受託体制を強化し
ていく。その足掛かりとな
るのが、ヒト臓器マウスの
開発だ。来年をメドに事業
化する計画。



ヒト臓器マウスは、従来
の免疫不全マウスを使うこ
となく、ヒトiPS細胞から
分化誘導させた肝細胞を
胎児の卵黄嚢血管経由で移
植することで、正常なマウ
ス体内にヒト肝臓を構築で
きるのが特徴。

新薬開発では、動物で得
られた薬効がヒトで再現で
きないというケースが起こ
り得るが、ヒトの細胞を用
いて動物の体内で検証でき
るため、早期段階での化合
物絞り込みで有用となる可
能性がある。福永氏は、「こ
の技術は他社も確立できて
いない領域。事業化できれ
ば、トランスジェニックス
受託サービス、CROの売
上を拡大することができ
る」と販路開拓につながる
との考えを示す。

技術的には、トランス
ジェニックスの評価技術を、
新薬リサーチセンターが動
物モデルの体内評価系で再
現させるスタンス。新薬リ
サーチセンターが製薬企業
各社の動物モデルにおける
ニーズを把握しているた
め、トランスジェニックスが
自社の遺伝子破壊マウスの
データベースなどから、他
社提携、自社開発での開発
を判断し、顧客ニーズから
事業化につなげていく。
福永氏は、今後の方向性
について、「製薬企業の医
薬品開発戦略で対等な関係
になれるようにし、共同開
発していけるようになりた
い」と話す。基礎研究から
非臨床へとサービスが広
がっていく中、課題は臨床
試験の事業基盤をどう強化
していくか。現在は、ジェ
ネリック医薬品の同等性試
験を受託しているが、個別
化医療が進展する中、ジェ
ネティクスラボのコンパニ
オン診断薬開発の強みを生
かし、他社提携による事業
強化を視野に入れる。

医薬品売上が全体の約6
割で、残りは食品の薬効薬
理試験、安全性試験、臨床
試験。非臨床から臨床で医
薬品と食品の二つの事業の
柱を持ったCROも珍しい
ともいえる。「当面は10%
成長を達成できる」と福永
氏。今期は売上20億円を視
界にとらえ、安定的な成長
軌道に乗せる。